ライフストーリーを活用した地域生涯学習の実証的研究（続）
― 野殿・童仙房における記憶を共同生成し、地域の物語を構築する試み ―

1．研究の目的

本年度の活動ではライフヒストリーの手法を用いて聞き取り調査を行い、地域に暮らす人々の生活・文化・自然・産業などに関わる「記憶」を収集・整理・研究した。この実践・研究活動を通して、地域の固有な知や価値を再認識するだけでなく、地域の「記憶」を創造する過程とその記録によって、地域の今を捉え直し、人と人とのつながりを深めうる契機となることも目的としている。

フィールドである野殿・童仙房地域は、京都の南山城村の高原における農業集落であり、産業の衰退や高齢化・過疎化などの課題を抱えつつも、持続的な地域づくりを模索している。地域づくりにおける課題の一つは、生活の近代化や人々の移動を背景とした、土地に暮らす人々の経験知や生活の知を語り伝える場の喪失である。大学との連携においては、地域の知と大学の知とが出会う中で、土地に根ざした知や世代を越えて伝える記憶の共有、語り合う場における地域の物語の構築を目指した取り組みを行ってきた。

2．研究チームの構成

研究代表者：鎹　純香（Ｄ１）
研究分担者：辻　喜代司（Ｄ３）、岡田　光恵（Ｍ２）、
山口　記世（Ｍ２）、王　雯（Ｍ１）

3．研究活動の概要

本コロキアム研究は野殿・童仙房地域における実践と調査を基盤とする。よって特に前半では地域活動に関わりつつも、研究の手法や理論的枠組みの構築のため、質的研究に関わる文献を基にディスカッション形式による学習活動を行い、研究方法についての課題の共有と探究を行った。また同時に、地域に関わるチームのメンバーそれぞれの問題意識を共有しつつ、地域に関する資料や過去４年間にわたる研究の蓄積を検討することで、地域の歴史、産業、暮らしに関する重層的な理解に努めた。

そして、後半ではそれぞれが深めた問題意識を持ちつつも地域の活動へ参加し、地域の方との出会い、そして交流と対話の中で研究の可能性を模索していった。以下にその具体的な内容を紹介する。

①「みんぐ無量館」館長、川下長久さんへの聞き取り

南山城村の「みんぐ無量館」は平屋建ての民家を利用して、古い民具の数々を収集・保存・展示している手作りの資料館である。館長である川下長久氏は、村民から提供された民具を提供された方の名前と共に全て保存し、「無量館」を訪れた際には、自らそれぞれの道具についての記憶を語りつつ来館者に説明する。また、川下氏は民具と同様、地域に伝わる民謡なども録音・保存している。このように近隣の村から集められた民具や民謡は、川下氏を通して過去の村民の暮らしの記憶を今に伝える。調査においては、川下氏に道具にまつわる生活の記憶を語っていただくと同時に、このような手作りの資料館を作るにいたった経緯などを伺った。

②旧野殿・童仙房小学校における地域主体の「水曜ひろば」における協働

「水曜ひろば」は童仙房に住む女性たちによって2011年から始まった活動である。旧野殿・童仙房小学校を利用して、毎週水曜日の午後から地元の子供や地域の大人が集まり、苔玉作りや陶芸など地域の自然や活動に関わる人それぞれの経験知を活かして、楽しみつつ集う場を作りだしつつある。大学の院生、学生は定期的に「水曜ひろば」の活動に参加しつつ、童仙房で暮らす女性に地域と地域で暮らすことについて、そして地域でつながっていく活動へのそれぞれの思いなどを伺った。

③地域の防災ネットワークづくりをめざした童仙房消防団との協働

野殿・童仙房は中山間地にあり、災害時には「孤立」や「情報途絶」に直面しやすく、高齢化による人手不足が問題になる一方で、食やライフラインに関しては都市部より自律的であるという魅力もある。防災をテーマに地域を捉え直すことで、地域の暮らしやその土地特有の知が浮き彫りになる。本研究では、消防団と連携して防災に向けた話し合いを重ねつつ、地域をつなげるきっかけとして「防災のつどい」を開催し、地域の方と大学関係者とが入り混じってワークショップを行った。また、H28年の南山城村大水害のことをふり返り、炊き出し体験を兼ねて、災害の経験を語り伝える場を設けた。この第一回目の「つどい」を通して、災害時だけでなく、普段の生活から世代を超えて経験知を語り継ぐことの重要さや、人と人がつながっていく暮らしの在り方への転換の必要性などが再確認され、今後の地域のネットワーク作りの第一歩となった。

（文責：鎹　純香）